

# 6月23日：ご提案資料

VER1.0 2014年06月23日 作成

# 1. 面談1回目のまとめ

(実施済：2014年06月06日(金) 17:00~17:20)

## ◆ 依頼の目的：仮説

売上目標達成のための体制作り

- 設計・調達・製造・納品までの一貫体制
- 顧客への納期順守
- 顧客満足度の継続

## ◆ 求められる施策：仮説

- 情報活用力を強化して、業務プロセスの最適化を計る
- リアルタイムなデータ情報の一元管理及び共有化できる仕組み
- いち早く状況変化を察知し、判断を行うことができる実行力のある組織体制

## ◆ 求められる期待効果：仮説

- 業務の最適化、スムーズな部門間の連携
- 経営上の意思決定への迅速化と共有化
- 情報の精度向上と可視化
- 業務の属人化の排除
- チェックポイントの早期監視

目的を達成するための具体的な経営課題/ニーズが、何かを2回目で確認する

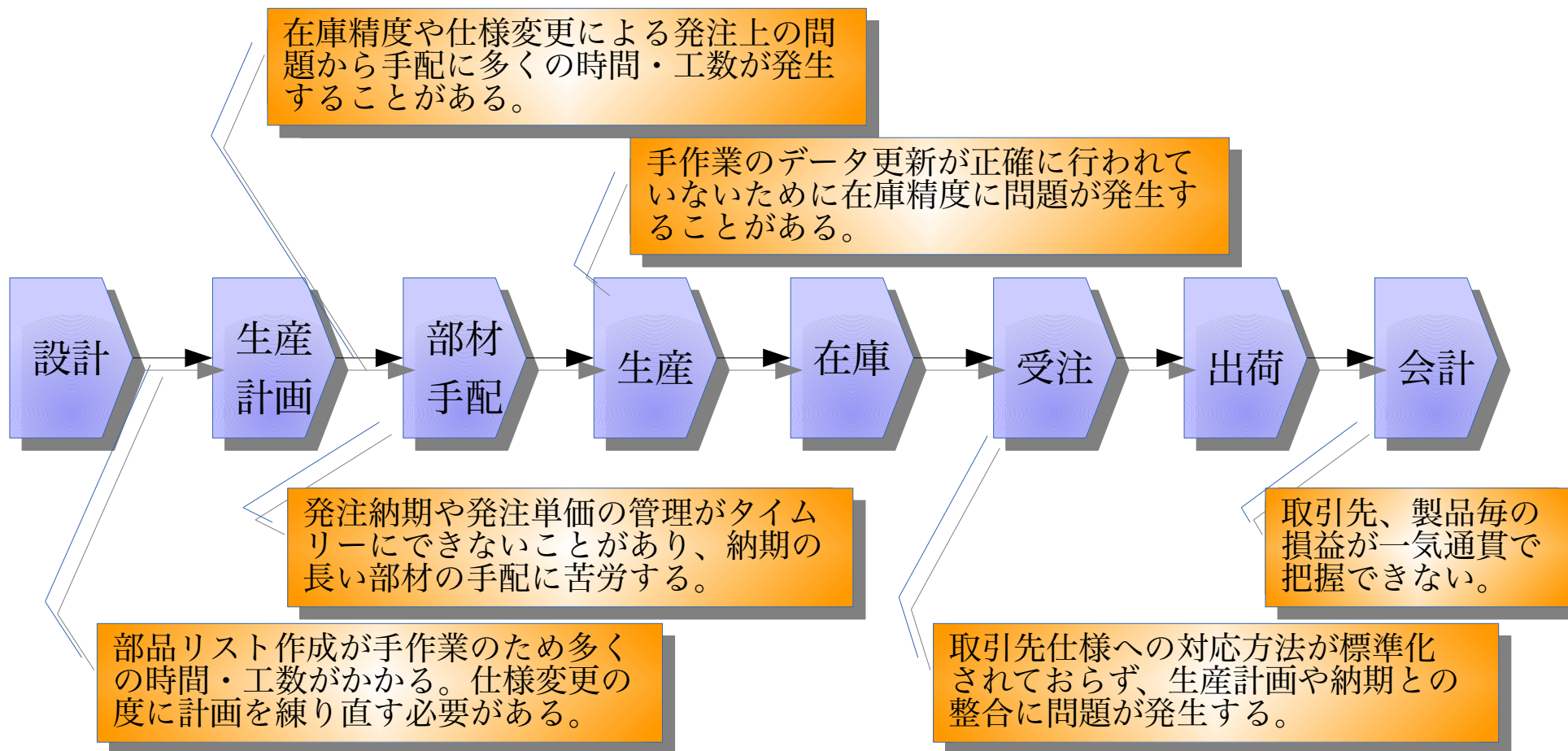
情報活用による業務改革

Phase1：属人的な業務  
⇒プロセス化、データ標準化  
Phase2：共通・効率的業務  
⇒ナレッジ化  
Phase3：自発的・強調的業務

幹となる業務プロセスの洗い出し

## 2. ご支援の基本的理解（今後の課題を想定）

現行業務においては、各担当者が管理業務と本業務を効率よく作業されていますが、現行のやり方では変化対応の限界にきていると理解しています。



### 想定される原因

- ① データ標準化不備
- ② 業務間のデータ連携不備
- ③ 手作業での在庫管理
- ④ 標準的な業務プロセス確立の不備

### 3. ご支援の目的

貴社、支援内容の目的を以下のように理解しています。

< ご支援が必要な背景（仮説） >

外部要因

グローバルに展開する取引先からのコスト削減要請

競争力強化のための生産技術向上への要請

取引先からの一貫体制による短納期依頼

内部要因

仕事量が増えたことによる顧客満足度の信頼低下防止

人に依存したプロセスとシステムによる情報共有の壁

業務管理体制の強化

< ご支援の目的 >

基幹システムの構築

①ものの動きがリアルタイムに整合性を持って蓄積され、かつ一元管理されることによる業務一貫の効率化の促進

共通尺度・プロセスの導入

②会社全体で情報を一元管理するための管理基準（マスタ管理、実績計上）及びプロセス共通化の実現

変化対応力のあるIT導入

③社会変化に追随できると共に、最新のIT技術を取り込めるシステム基盤とデータ標準

## 4. ご支援の期待効果

単なる管理業務の効率化ではなく、全社的な効果を目的とする必要があると認識しています。

領域	施策（案）	代表的な期待効果	検討課題	実現方法	備考
販売	受注の標準化	<ul style="list-style-type: none"><li>受注工数削減</li><li>納期の見える化</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>伝票入力工数</li></ul>	IT	
生産・調達	マスタ登録プロセスの標準化	<ul style="list-style-type: none"><li>データ標準化（工数Up?）</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>マスタ管理工数</li></ul>	IT	
	生産計画プロセスの確立	<ul style="list-style-type: none"><li>在庫削減</li><li>需給調整工数削減</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>生産工程との簡易入力連携</li></ul>	IT	
	生産及び在庫の見える化	<ul style="list-style-type: none"><li>調達工数削減</li><li>在庫削減</li></ul>		IT	
経営管理	製品別・取引先別損益情報の把握	<ul style="list-style-type: none"><li>レポート工数削減</li><li>経営見える化</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>評価指標の決定</li></ul>	IT	

※備考

全体として、管理レベル向上に伴い管理者及びシステム入力のデータ量が増加する。

## 5. ご提案のコンセプト

今回最も重視すべき点は、「状況変化に対応できるように、情報力を活かした早期な判断ができる業務の仕組み」にあるものと認識しています。

### < ご提案の重要成功要因 >

早く  
確実に  
シンプルに

「短期かつ確実なる導入」を実現する為には、ERPパッケージが持つ標準プロセスをテンプレートとして有効活用し、現行業務からの現状分析、要件定義や基本設計・開発工数の大幅削減を図ることが不可欠

「テンプレートアプローチ」を採用する場合、BPRの断行が最重要ポイントとなるため、「仮説新業務機能」の適用と、そのノウハウを持ったアドバイザーの採用が不可欠

上記方法論を駆使したとしても、対応できない業務は発生するものであり、これら「要対応」となった領域にアドバイスできる経験豊富な業務スキルを有したアドバイザーの採用が不可欠

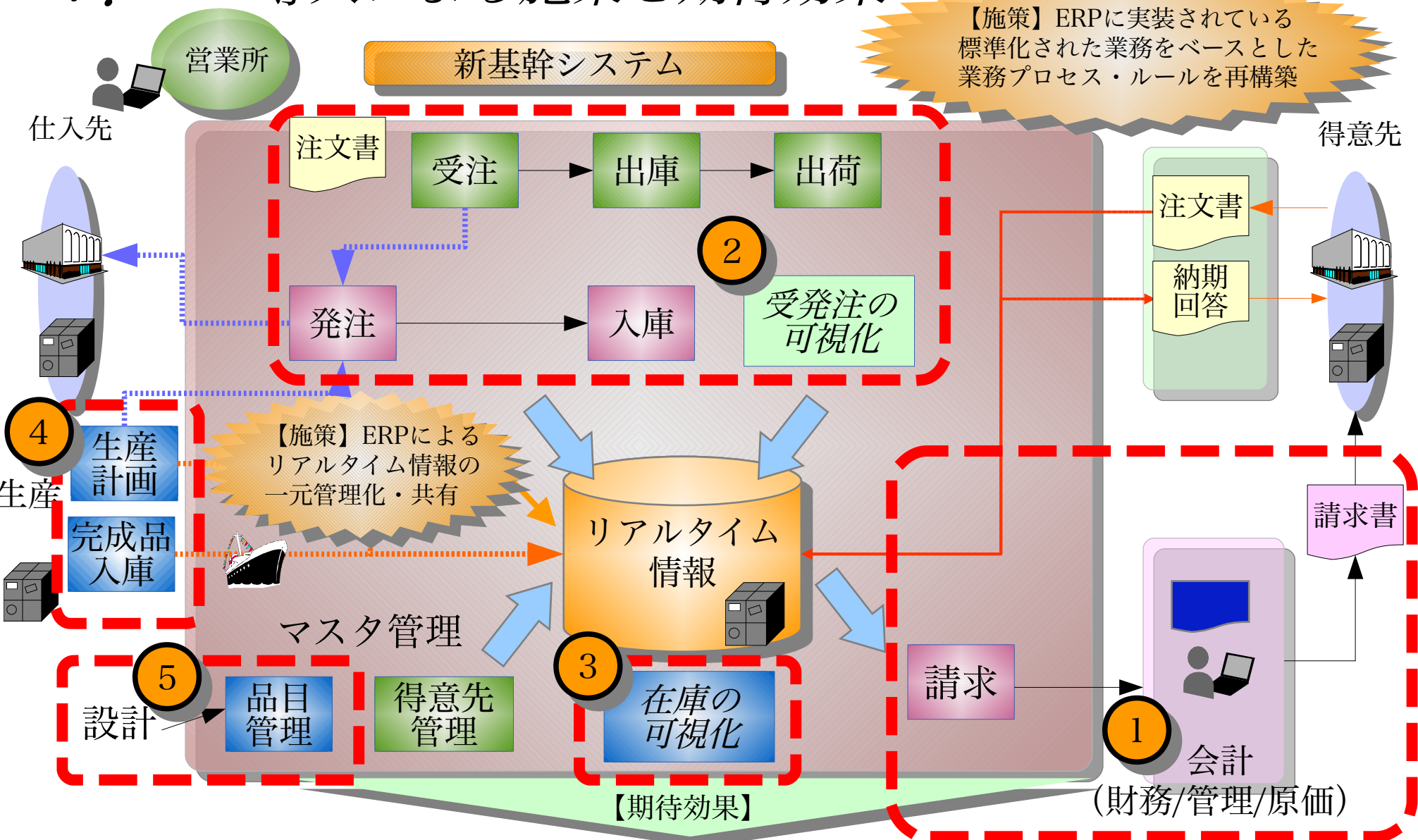
## 6. 要件定義の進め方 (Phase1: プロセス化、データ標準化)

今回の推奨

	現状分析型	仮説検証型 Type1	仮説検証型 Type2 ERP導入型
メリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>現状業務の課題・ニーズを洗い出し改善するには有効である</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>客観的なあるべき姿から現実的な評価を行うことができる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ERPが実装している標準プロセスをあるべき姿として評価を早く行うことができる</li> </ul>
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>経営レベルでの導入効果は望めない</li> <li>現状分析、基本設計、開発、稼動するまで導入効果を評価することができない</li> <li>現状の調査に時間がかかり、洗い出した結果も分析・評価できるかどうかやってみないとわからない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>現場のモチベーションが下がらないよう工夫が必要となる (体制・工数増大)</li> <li>導入で期待しているスコープが現実離れしていないか見極めが重要となる</li> <li>現状からあるべき姿を描くことが、できるかどうかやってみないとわからない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>要件定義に当りERPのスキル・知識が必要となる</li> <li>ERPとのギャップをどうするのか検討が必要となる</li> <li>業務間での整合性が取れるよう考慮する必要がある</li> </ul>
効果	ボトムアップ 業務改善レベル	トップダウン 経営改革レベル	グローバル 業界ベストプラクティス

# 7. ERP導入による施策と期待効果

【施策】ERPに実装されている標準化された業務をベースとした業務プロセス・ルールを再構築



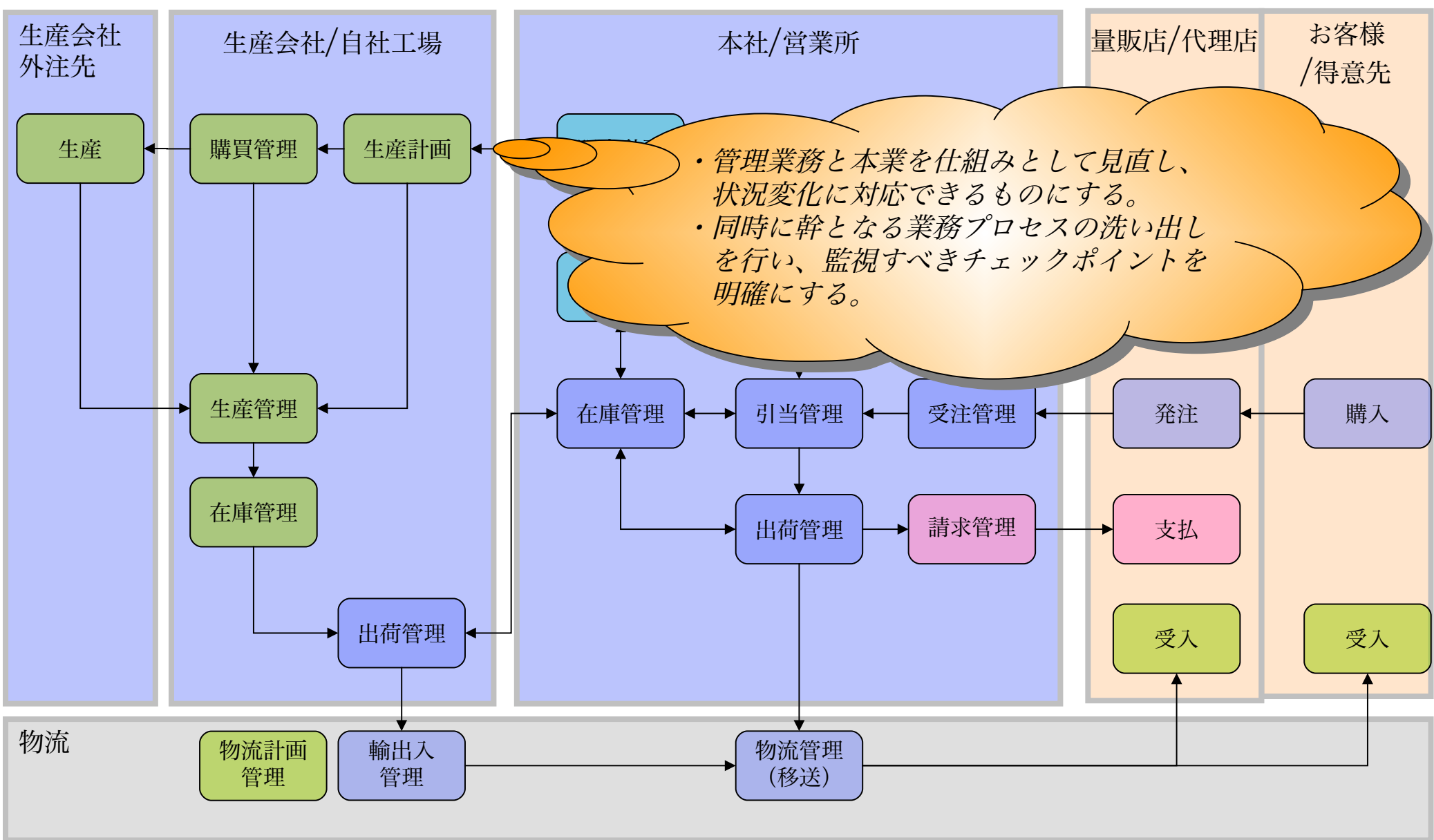
【期待効果】

- 業務の最適化/効率化  
スムーズな部門間連携
- 経営上の意思決定への  
迅速化と可視化
- 情報の精度向上と可視化
- 業務の属人化の排除

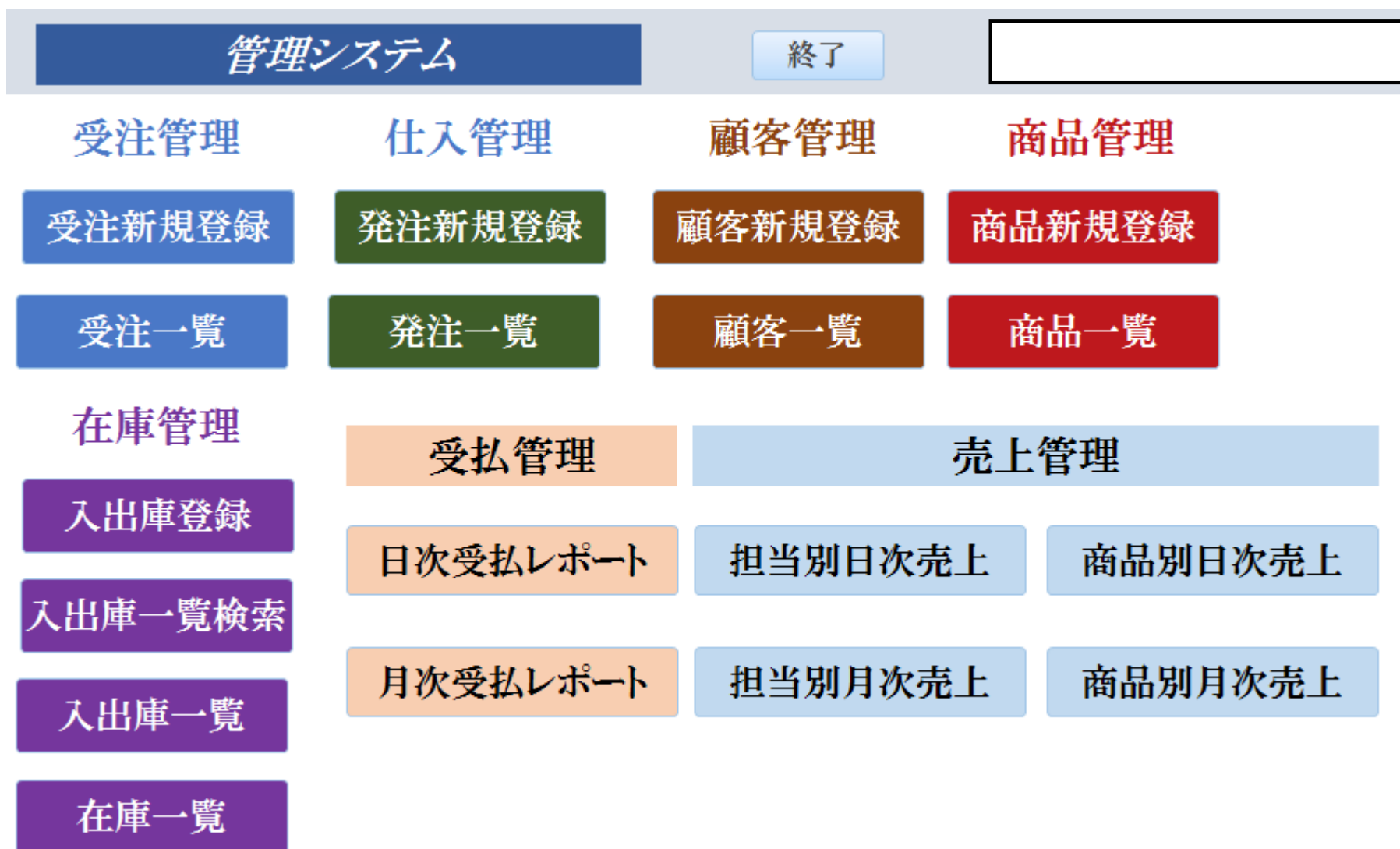


# 8. 新業務プロセスフロー (全体図)

■ 販売管理    ■ 生産管理    ■ 営業管理  
■ 財務管理

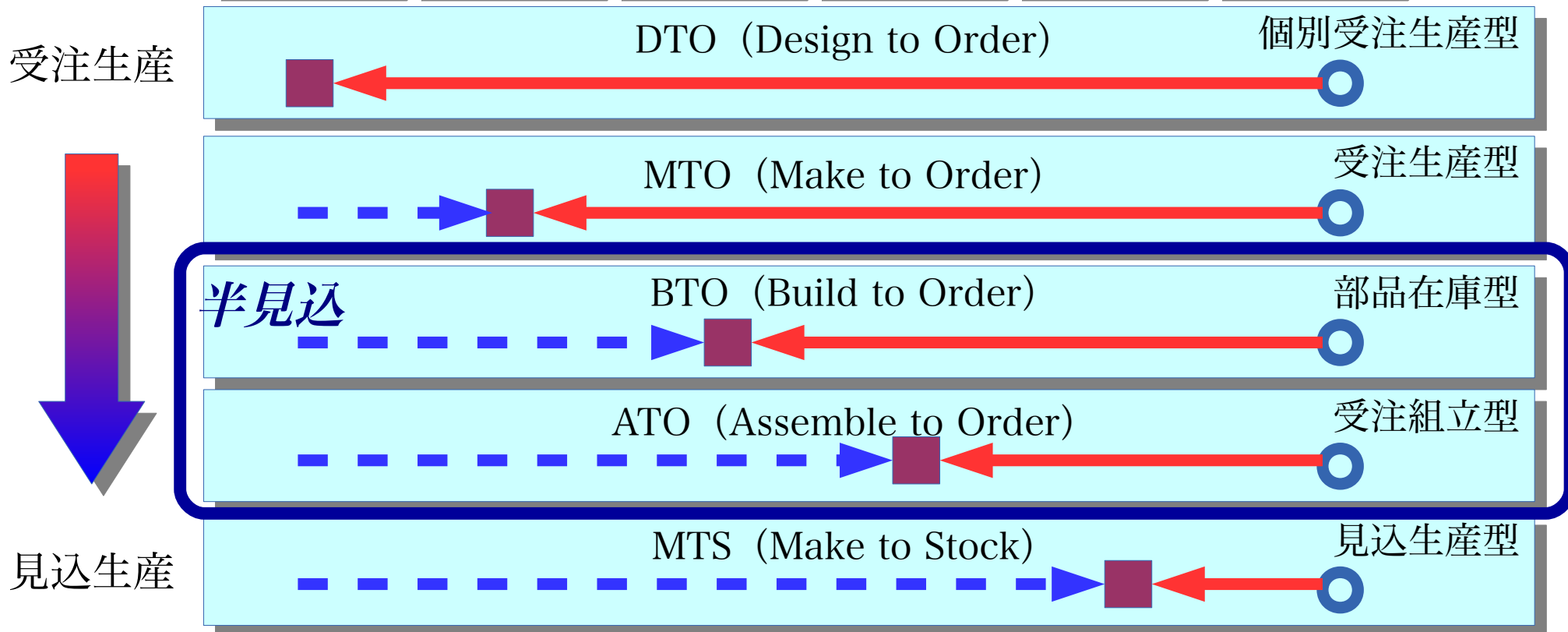


## 9. 簡易業務システム (ご参考)



# (ERP導入企業ご参考案) 生産形態の種類

- ERPは、様々な生産形態に対応しており、パラメータの変更で切り替えます。
- 導入する前に御社の生産形態に対応できるか、別途検討する必要があります。



○ 出荷ポイント      ← プルプロセス (受注生産)  
■ プル/プッシュポイント      - - - → プッシュプロセス (計画生産)

# (ERP導入企業ご参考案) 半見込生産

- 生産計画で、PUSH生産する工程は、所要（生産計画）とは紐付かない
- 顧客受注で、PULL生産する工程は、所要（顧客受注）と紐づく指図とする
- 生産実績は、生産進捗管理・在庫管理・原価管理それぞれの観点から決められた工程毎に行う

